だって、だいきらい。

苫古

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だって、だいきらい。

【Ｎコード】
Ｎ５８３０Ｘ

【作者名】
苫古

【あらすじ】
綺麗なドレスと、素敵なベール。左手に立って優しくエスコートしてくれているのは、大好きなわたしの父さま。なのに、長く続く紅い絨毯を進んでいった先には……あれ？　＋＋＋＋＋＋＋＋　そんなはずないです。……だって彼は――――――――わたしのことが、だいきらいなんですから。

01

白い扉が、目の前で開かれた。

次の瞬間、視界を滲ませた、溢れんばかりの光。

扉の向こうに広がる大きな空間を余すところなく満たすその光は、わたしが向き合っている正面――遥か高い天井から中央舞台の祭壇までを覆う、白と金を基調とした繊細なステンドグラスよりもたらされているもの。

神聖かつ典雅な華やぎを纏う陽光に目を眩ませつつも、わたし――ダフネは、懸命に灰色（パール・グレイ）の瞳を瞬かせて、扉の向こうを見渡した。

慣れてきた視界の中で、像を結び始めたのは、人。

人、人、人、人の波。

神殿で一番大きな祭壇付きホールの空間を、扉から中央舞台に向かうまでの深紅の絨毯で線引きしたように分かれて居並ぶ、数え切れない人間たちが、一様にわたしを見つめていた。

大きく見開かれた千以上の瞳が、びくりと背筋を震わせたわたしの姿を映す。

思いもよらぬ光景に、何も考えず踏み込もうとしていた足が凍った。

（――――な、なに？　何ですか、コレは）

何の集会……いや、むしろ祭？

これほど大勢の人間がこんな朝っぱらから集まっているなんて、只事じゃない。

しかも、なんでみんな正装？

咲き誇る花々のようなドレスを纏った、品の良い貴婦人やうら若き乙女たち。隙なく宮廷着を着こんだ、凛々しい紳士たち。

とっておきのおめかしなのだろうか、きちんと整えられた服装で

どこか落ち着きなく、でも、何か楽しみで仕方がないものを待っている様子の子供たちの姿もある。
そんな大勢の人々の視線が、一斉に突き刺さり、思わず我が身を引いてしまった。
……もしかして、もしかしなくとも、おじゃまする部屋を間違えちゃったんじゃ……。
落ち着け、落ち着きなさい、わたし！
改めて正し直した姿勢で、きちんと前を向いたまま。且つ、迅速に。
背中に浮き始めた嫌な汗の存在を意識しつつも、この状況をどうにかするため、わたしの脳みそが活動を始める。
（と、とりあえずは……）
この場を一刻も早く脱するために、〈相棒（パートナー）〉たる隣の人間の意識を戻して差し上げることが先決だ。
さっきから、全然動かないところを見ると、わたしと同じように凍っちゃってるのかもしれない。
……どうにかしなければ！
ごくりと唾を呑みこんだわたしは、隣に立つその男（ひと）――――いつになく上品な、紺を基調とした装いで身を包む、有能で博識、温厚、美形、美麗魔導士……とまあ、美点を上げれば奇跡の泉のごとく溢れ出す素敵男性（ロマンス・グレー）、もとい愛する父さまの上着の袖を、きゅっと握った。
いつも通り、一人娘たるわたしをエスコートしてくれていた紳士的な父さまの腕。
あぁ、素敵。
それに絡めていた手で、控えめに小さく服の袖を引く。
ん……あれ？
……反応なし。
もう一度引っ張ってみたけれど。
……あれれ？

どうしたんでしょう。いつもなら、何でもすぐに気が付いてくださるのに。何と言っても、父さまは完璧でいらっしゃるから。
わたしはこっそりと、隣に立っている父さまを視線だけで仰ぎ見た。
「とうさ……」
“ま”まで言いかけた言葉を、思わず呑み込む。
「……っく」
噛締められた唇から洩れる声。
ふるふると小刻みに揺れる、老いてなお頼もしいと、娘ながらに慕う肩。
皺が刻まれた目尻から、ぽろぽろと零れゆく父の涙を目前に、わたしは唖然とした。
（なんでお泣きになってるんですか、父さまぁ――――――！？）
滂沱のごとく涙を流す父。
いつも穏やかで優しい微笑みを浮かべているこの男が、こんなに泣いている姿を見るのなんて、わたしがまだ幼い頃に亡くなった、母の葬儀のとき以来じゃないでしょうか。
正直、大の大人（しかも初老男性）に、ここまで盛大に泣かれると……いくら素敵父さまであるとはいえ、ちょっと怖い。
どうしたというのでしょう。
……そう言えば最近、少し情緒不安定でいらしたみたいだけれど。
気が付けば、どこか悲しそうな顔でわたしを見つめていた父さま。
「なぁに？　どうかしました？」
そう訊ねれば、何でもないよと弱々しく笑んで、切な気な吐息を吐いていた。
昨夜なんて、特に酷かった。彼女の顔を見るだけで、口元をふるふるさせたりして……。
そこまで考え、わたしははっと息を止めた。
（まさか、ご病気！？）
真っ青な顔色に、謎の痙攣、そして世を儚んだような吐息……。

そんな、そんなの嫌です。
父さまは、わたしの唯一の大切な家族なのに！
「と、とうさま？」
わたしと同じ色をした父さまの瞳に、泣きそうに歪んだわたしの顔が映り込む。そんなわたしを、父さまはしみじみといった様子で眺め……、
「いこうか、ダフネ」
柔らかくて、温かい微笑み。
白い手袋をした大きな手の平で、腕に掛ったわたしの手を優しく握ってくれた。
「は、はい」
反射的にこくりと頷いて、ぐっと涙を堪える。
そうです、いまはまず今日の目的――父さまの大事な用事とやらを終えてしまわねば。
わたしは、ホールの中へと進み出した父さまに連れられて、赤い絨毯を純白の靴で一歩踏んだ。
その瞬間、聖堂内に居並ぶ人々の間から、一斉に漏れ聞こえた様々な吐息。
それらは石造りのドーム型天井に反響して、小さな音の嵐を生んだ。
口の中から、バクバクと波打つ心臓が、バイーンとばかりに飛び出しそうになる。
（――何！？　わたし、どこか変でした？？）
でも、何もみんなして、一斉に呆れた溜息を吐くことないじゃないですかっ！　傷つくでしょう、泣いちゃいますよ！？
ビクついたわたしは、いつもよりたっぷりとしたドレスのスカートの裾を、思わず踏み付けてしまった。
「っきゃ！」
転びそうになって、微かに悲鳴を洩らしてしまったけれど、父さまが素敵に華麗に素早く支えてくれたので、何とか姿勢を立て直す。

さすが、父さま。
わたしたちはちらりと視線を合わせて、にっこりとお互いに笑みを交わした。
そしてその時、背後からそっと掛けられた、しっとりとした低めの声。
「大丈夫？　気をつけてね、ダフネ」
視線だけで振り返り、優しい気づかいをくれたその人にも、わたしは笑みを送った。
「はい。ありがとうございます、アルテミス」
こそこそとしたお礼の呟きに、滝のようなまっすぐな銀月色（シルバー・ムーン）の髪を揺らして微笑みを返してくれたのは、大切なわたしの大親友。
付き添いで同行してくれている彼女も、こんな状況に突然陥ってしまって驚いているだろうに、それを面に出すこともなく冷静そのものだ。こちらも、さすがアルテミス。
世界の至宝、月の女神、と名高い美女中の美女たる彼女は、この大国でも有数の才媛として驀進的に活躍している素晴らしい女性で、大好きな友人であるだけでなく、わたしの憧れでもある。
学生時代の知り合い曰く、わたしなんかが彼女の友達で居続けていることは、学園２６不思議の一つに値するとか。……他に２５個もあるんだったら、わたしの１つ分くらい見逃して、そっとしておいて欲しいものだ。
その女神の如き親友が、わたしが今着ているドレスの背後の裾を、すんなりとした白皙の細腕に掛けるようにして持ち上げてくれた。
彼女が今日、付き添いとして来てくれた理由は、まさにこれのせい。
真っ白な粉雪色の布をふんだんに使った、豪華でいて品のある、ついでに半端ない重量もあるこのドレス。
（やっぱり、こんなドレス……わたしには似会いません）
この、ふんだんに惜しげもなく使われた高級布の量！　スカートの後ろ部分だけで、わたしの普段着が１０着は仕立てられそうだ。

総額いくらだったんですか、とプレゼントしてくれた父さまに聞いてみたいけれど……出来ない、怖すぎて。
何より、高価な品すぎて分不相応だという以前に、良くとって〈並〉程度の容姿のわたしには、全く似合っていないと、悲しいまでにはっきりと断言できる。
それこそ、アルテミスだったらステキに完璧に着こなせるに違いないのに。……何でわたし？　何かの罰ゲームにでも合っている気分です、全く。
いつもは足元までストンと落ちるだけの魔道院の長衣（ローブ）しか着ないから、剥き出しの肩や背中が気になって仕方がない。それならと、アルテミスが薄いベールを頭からすっぽりと被せてくれなかったら、きっと恥ずかしくて外に出られなかっただろう。
あぁ、散りばめられた小さな宝石たちが目に痛い。
でも、父さまが言う今日の〈用事〉には、どうしてもこの服じゃなきゃって、父さまとアルテミスが二人揃って言うものだから……
……はぁ。
そこまで考えたところで、聖堂いっぱいに重厚な音色が響き渡った。
その音が、あまりに唐突かつ大音量で空気を震わせたものだから、臆病なわたしはまたもや全身でビクついてしまった。
これは……気鳴鍵盤楽器（パイプ・オルガン）？
心を落ち着けて耳にすれば、低音から高音、多種多様な音階が整然たる嵐を為すかの如く波打ち、身体の奥を震わせる音の重なりを生んでいて……まあ、簡単に言うと、とっても壮麗で綺麗な音。
今まであまり聞く機会に恵まれなかったので、こんな状況でもちょっと嬉しくなった。
――――だけれど、おかしいとも思う。
これは、確か重要な儀式のときにしか演奏されないはずなのに。
ほんとに、これは何事なのかと、聖堂中をもっとよく観察したくてたまらないのだけれど、衆人環視の中できょろきょろするのは、

とてもはしたないことなのでご法度だ。父さまやアルテミスに恥をかかせるわけにはいかない。
重厚な楽音のなか、父さまの腕に手を絡めたわたしは、一歩一歩ゆっくりと、父さまの歩みに合わせて歩む。
刺すような周囲の視線から逃れるように、ひたすら視線を俯ける。だから、揺れるベール越しに見えているのは、紅い絨毯の色だけ。いつの間にか、わたしは無意識に、唇を強く噛締めていた。
（いやだな……）
この色の上を歩くのは、嫌。
……19歳にもなって、こんなこと言うなんて、子供っぽい？
――――べつに、そう思われたっていい。
紅色は、わたしが一番だいきらいな色。
この色だって、きっとわたしのことが嫌いなはず。
――――だって、これはあのひとの色なのだもの。
行く先に聳え立つステンド・グラスからの眩い光が、濃い紅色を徐々に明るく鮮やかに染め上げていくのを、無感動な瞳に映しながら、ただひたすらに父さまに寄り添う。
余裕がなくて気が付かなかったけれど、紺色の上着の袖に添えた手には、知らず知らずの内に、力が入ってしまっていたらしい。
強張ったわたしの手――――今朝、ドレスに合わせて選んだといって父さまから贈られた、白い編地（レース）の手袋に包まれたわたしの手に、温かくて大きな、優しい手の平が重ねられる。
……ああ。
まるで溶かされたように、手袋の下で血の気を失うほど固く握りしめていた拳が緩み、少しだけくしゃくしゃになってしまった父さまの上着の生地からほどけていく。
「ダフネ」
低くて慈愛に満ちた、父さまの声。
いつの間にか、わたしたちは歩みを止めていた。
入口から見れば、あんなに長いと感じられていたはずの紅色の道

がいつの間にか終り、光包まれる祭壇舞台へと続く階段の前で、わたしはわたしを見下ろす父さまと向かい合っている。
「父さま……？」
わたしの不安に満ちた問いかけには答えず、父さまは笑んだまま、自らの腕に未だ添えられたままだったわたしの手を、ゆっくりと、両手とも持ち上げた。
広い父さまの胸の前に、一つに集めるようにして包み込まれた、わたしの両手。
手の平で大切そうに包(くる)んだ娘(わたし)の指に、父さまはキスを一つ落した。
「私のダフネ」
幼い頃から変わらない、甘やかしきった口調。
家でならともかく、こんなに大勢の前で口付けた父に、ぎょっとした表情(かお)を隠せなかったわたしは、次の言葉で更なる混乱をきたした。

「———幸せに、なるんだよ」

……
……
……はい？

02

「え、えと、あの、父さま？」
どういう意味ですか？
何ゆえに、ここでその言葉？
今の状況で、そんな台詞が出て来る意味が、わたしにはちょっと……。
ここはひとつ、「父様の娘に生まれることが出来て、今でもじゅうぶん幸せですが」と、ちゃんと伝えておくべきなのだろうか。むむむ。
そう、つらつらと悩み込んでいると、わたしを慈しみに満ちた目で見つめていた父さまの視線が、ふと、横に逸らされた。
なに？
なにがあるのですか？
父さまにつられるように、わたしも同じ方向を――――祭壇へと続く階段の裾の方を、見る。
「――――っ」
心音が、全身を震わせた。
たぶんきっと、一瞬、心臓が止まってしまったに違いない。それくらいの衝撃。
瞬間的に凍りついたかのような身体中の血液が、今度は冷たさを伴って、煩い雑音を立てながら駆け廻り始める。
みるみる冷えていく指先。
感覚が無くなったそのわたしの右手が、父さまの手によって運ばれていく。それを、わたしは動かない感情のまま、唯ただ信じられない思いで瞳に映していた。
やがて、真っ直ぐに差し出された、編地に包まれたわたしの手。
「この子を、よろしく頼む」
その父さまの一言に、紅の下で青ざめているであろう唇がわなな

くのを、わたしは押し隠せなかった。
（こんなの――――うそです）
そう、性質の悪い嘘。そうに決まっている。
だから、こんな――――――、

「はい」

応えがあるとともに、父さまの掌から下ろされていく、わたしの手。
祝福の光溢れる祭壇へと続く、階の袂。
白い陽光の中に差し出されたその人の手は、わたしの小さな手の平を、自らのそれで柔らかく受け止めた。
「――――うそ……」
温かさを失った己の唇が、震えを帯びたその一言を擦れた音として紡ぐのを、どこか遠くで耳にしたかのように聞いた。
光に慣れた視界。
天上から降り注ぐ白光の世界の中で、一つの鮮烈な色彩に、否応なく目を奪われる。
神世に存在するという聖なる焔の如き、純粋で、穢れのない一色――――紅。
何者をも薙ぎ払うかのような〈苛烈の紅〉の彩。
その煌めきを宿した髪を持つ人。
白皙の肌と彫り深い貌の造作は神懸かりなまでに麗しく、気品に満ちてはいるが、感嘆を洩らさずにはいられないほど凛々しくもあり、決して男性らしい印象を損なうものではない。
わたしは、知っている。
ずっと前から、この男（ひと）を。
まるで、烈火を纏う太陽神のような、この男（ひと）を。

襟足で短めに整えられた緩く波打つ髪とは異なり、少々長めに取られた前髪の陰からわたしを見据える、鋭い金の瞳も。
この世から掻き消えてしまいたい、そう何度もわたしに思わせた、冷徹な言葉しか吐き捨てない口唇も。
美しい――――認めたくない、目にしたくなんてない、だけど……美しい……。
その、彼の手の平に添え置かれた、わたしの手。
なんの冗談なのでしょうか、これは。
微かに震えて鳴る奥歯の音だけが、いやに頭に響く。それでも、麻痺したわたしの脳は、のろのろと思考を始めた。
あれ？
（なぜ、このひとは白い服を着ているのでしょう？）
混じり気ない純白の糸で織り上げられた、多分、最高級であろう衣裳。典雅でいて、神聖さを帯びたその衣は、寸分の狂いなく、彼の長身をすっきりと覆っている。
彼の容姿、身分に相応しい衣裳。
今日、この場に集っている大勢の乙女たちの甘やかな吐息を洗いざらい受けたことは、想像に難くない。
たとえ、彼がわたしにとって怖れの塊のような存在であっても、それだけは分かる。
わたしを射抜くように注がれる金色の視線、痛みを感じるほどのそれに怯えている今この時だって、それくらいのことは想像できる。
目を、合わせたくない。うろうろと彷徨う、わたしの視線。
だけど、彼の胸元を飾る〈それ〉を見つけた瞬間――――。

豪華な、粉雪色のドレス。
丁寧に施された、初々しさを煽る化粧。
光の糸で紡いだかのように美しく軽やかな、全身を覆うベール。
常では奏でられない、祝福の気鳴鍵盤楽器。
父から贈られた、繊細な編地の手袋。

気が付いてしまった。
分かってしまった、全部。
……ああ、でも、そんなことって。
――――――背筋に、一気に怖気が走る。
まるで人ごとののように眺めていたその光景から、意識が急激に現実へと引き戻された。
そして、彼の傍にいるときに、いつも沸き起こってくる、あの衝動。

逃げなきゃ。

無意識に示される、魂にまで刷り込まれているんじゃないかと思うほどの、逃げなければという強い思い。
早く、早く、早く！
身を翻し、ドレスの裾をたくし上げ、全力で入口の扉まで走ればいい。
わたしがこの場を飛び出しても、父さまとアルテミスなら、きっと許してくれる。
残されたあとの人たちなんて……彼のことなんて、どうなろうと知らない。
ずっとそうやって逃げてきた。
小さな子供の頃から、ずっとずっと。
身体が、意識よりも一歩早く反応する。
彼の手の平に委ねられた、わたしの手。わたしたちを繋ごうとする象徴にも見えるおぞましいそれ。
（――――いやっ）

背筋を震わせたわたしは、断ち切るように腕を引き――――――、

「逃がさない」

指先が離れかけた瞬間、囚われた手。

逃がさないと言ったその言葉通り、戒めのようにきつく握り締められた。

――――痛い！

走った痛みに思わず顔を歪めた時、そのままぐいと腕を引っ張られる。

バランスを崩しかけたわたしの腰に手を添えた彼は、そのままわたしを自分の胸元に抱き寄せた。

……しまった、隙を突かれてしまった。

まあ、彼とわたしとでは、重ねた経験値が違いすぎるので、仕方ないと言えばそれまでなのだけれど。

悔しさと怖ろしさを必死に殺しながら、わたしは唇を噛んで視線を俯ける。

大体、抵抗する間も与えず、難なくこういう動作をこなしてしまうあたりから、彼が女性慣れしているのだという事実が窺えるというものだ。

なんて破廉恥な男。

このっ、乙女の敵！

……そんなこと、口が裂けたって言えないけれど。

でも、なによりわたしを絶望させたのは、ホール全体で輪唱を奏でた感嘆の吐息だ。たぶん、鈍臭くも倒れそうになったわたしの身体を支えたかのように、周囲の目には映ったのだろう。

まんまと騙されているこの場の皆さんが、そこはかとなく憎い！

……あ、父さまとアルテミスは別だけれど。

誰も、いまのわたしの心に気付いてなんてくれない。

助けてもくれない。

……もう、いや。
逃げたい。
この男の傍になんて、居たくないのに。
なのに……。

「逃げるなんて、絶対に許さないからな」

耳朶に注ぎ込まれた言葉。
彼の体温を持った吐息が、直に耳元に掛り、わたしは声無き悲鳴を上げた。
怖い、怖い怖い怖い、怖すぎる！
だけど、足に力が思うように入らない。
抵抗の力を奪われ、へにゃりと崩れかけたわたしを、何を思ってのことか、彼は一瞬だけ抱きしめた。
むぎゅっ、と彼の純白の衣裳の胸元で頬を潰されながら、絶望的な心境でわたしが目に映したのは、彼の胸元に飾られた花飾り。
愛の花、と呼ばれるプリア・モーナの花を中心に、特殊な意匠で様々な花を組み合わせたその胸飾りを、この国の女の子なら、誰もが一度は夢に見る。
いつか、大好きな男性が、自分のためにこの花飾りを付け、迎えに来てくれたらと。
そう――――間違っても、「自分を嫌っている男性」が、ではなく。

「来い、ダフネ」

やや乱暴にわたしの身体を押し離した彼は、小さな声で素早く命令してきた。
それに対し、わたしは了承の言葉を発することはおろか、微かな頷きすら返していない。

なのに、さっと背を向けた彼は、繋がれたままの手を力任せに引っ張り、足早に階段の方へと進んでいく。
祭壇へと続く、真っ白な石の階段。
長く続くそれを引き摺られるようにして登りながら、わたしは息苦しさに喘いだ。
———ドレスが重い。
さっきまでドレスの裾を持ってくれていたアルテミスは、下に残ってしまった。
———歩くのが早い。
父さまなら、もっとゆっくり足を進めて、わたしに合わせてくれるのに。
思いやりも気遣いも無く、ただ己が意思のままに前を行く紅い髪を持った後ろ姿を、いままで怖ろしさに身を震わせるだけだったわたしは、この時になって初めて睨んだ。

もう嫌だ。
離して。
逃げさせて。
これ以上、わたしを傷つけないで。

そう、叫びたいのに。
泣いてしまいたいのに。
(———こんなのって、ないですよ)
もう、さすがに分かっている。
このドレスの意味も、ベールの意味も、彼が胸に付けた花飾りの意味も、全部。
本人———花嫁であるわたしに、当日……いや、その瞬間まで知らされない華燭の典なんて、聞いたことがないけれど。
でも、何故?
どうしてわたしなの?

何でかなんて、わからない。想像もつかない。
どうして、だなんて……そんなこと、訊けるはずもない。

だって、わたしは――――――、

彼が、『大嫌い』な女の子のはずで。

だから、わたしも――――――、

彼のことが、『大嫌い』なのだから。

02（後書き）

更新は不定期です。
週1~ 2くらいを目標に頑張りたいのですけれど……面目ないです。

01（前書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ございません！

お気に入りと評価、拍手およびメッセージをくださいました皆さま、本当にありがとうございましたっ。

拙い文章で心苦しいのですが、楽しんで頂ければ幸いです。

01

……あぁ、本当になんて茶番。
なぜ、わたしはこんな晴れの場所に、彼と並んで立っているのでしょう？

いまわたしが立っているのは、白金色の光に包まれた祭壇の目前。
大いなる父神様。

わたし、貴方様の御威光に逆らうようなことを、何かいたしましたでしょうか？
地味で取り柄もない小娘らしく、大人しやかに暮らしていたはずなのに、何故このような仕打ちをなさるのでしょう。

……いま思い返せば、怪しげな前兆はいくらでもあったのに。
何も知らされていなかったとはいえ、ここまで御膳立てされてるんだから、何か察知すべきだった。

ここまでされて、どうして気付かないんですか、わたし！

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

わたしの国には、伝説がある。
大地に降り立った一人の神の物語と人間の乙女の物語。

世界創世より、幾千年を経た時代のこと。
天上界、地上界、地底界の3界を治める全知全能の父神の命により、邪竜を倒さんがため人の世を訪れた青年神は、戦いで負った傷を癒し、介抱してくれた心優しき人の娘と出会い――そして、恋に落ちた。

創造の眷族である神と、創られしものである人との恋。
それが、禁忌であると互いに知っていても。

神である青年は、彼女を伴侶とし、天で暮らすことを望んだ。
しかし、人の身である娘が清浄なる天上界に昇ることを、父神は赦さず。

青年神は父の赦しを乞うため、乙女を伴い旅をした。

長い旅だった。
時には辛く、時には危険に晒され。
だが、共にゆく娘の笑顔があれば、怖れるものは何も無かった。

やがて辿りついた、神世に最も近いとされていた険しい山の頂き。
娘とともに跪き、青年神は祈った。

――自らが天に還ることが出来なくても構わない。
――だがどうか、二人でともに生きることを赦して欲しいと。
――あなたにだけは、それを認めて欲しいと。

娘を愛する青年神は、父神のことをも敬い、愛していたのだから。

父神は涙した。
愛する勇敢な息子。
彼とその伴侶が旅する姿を、父神はずっと見守っていた。
その旅の間中、絶え間なく繋がれていた、二人の手。
どんなに険しい路でも、悪天候に晒されようとも、離されることなく繋がれていた手は、まるで互いを護り、慈しんでいるようで。

そんな二人を見ていた父神は、いつしか怒りを解いていた。

かわいい二人を呼び戻し、手元に置きたい。
だが、全てを統べる大神たる自分が、理を覆すことは出来ない。

「ならば、条件を一つ」

父神は、息子と人の娘に、美しい鏡を与えた。
この鏡は、神世と映し世を繋ぐ水鏡。
年に数度、この頂きにて鏡を用い、お前たちの軌跡を我に語れ。
それが約束出来るならば、お前たちの道幸を見守ろう――――と。

息子である神とその妻となった乙女は、父神との約束を守った。

二人が山の裾野に住まいを持ち、穏やかな日々を送るうち、彼らを慕った人々が集まって居を構えはじめ、それはやがて町となり、国と成った。

神から人へ、人から王へ。
大勢の人間に忠誠を誓われ、主と傅かれるようになっても、神である夫と妃になった女は、終生、父神との約束を違えたりなどしな

かった。

二人が生を終えた刻(とき)より、約二千年。

山の頂に聳え立つ白亜の天宮では、いまでも彼(か)の神の末裔たる王族が始祖の父たる大神との会合を為し、この国に加護と祝福をもたらしているという。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

（――――って話、結構好きだったんですけど）

建国神話として語り継がれているこの話は、絵本どころか学院の初等科で使う教科書にも載っている、有名な物語。

堅苦しい歴史の授業の中、一番はじめに習うこの国の王朝史だ。

とはいえ、その本質は恋物語なわけで。

授業中や休み時間に、同級生の女の子たちが頬を赤くして、きゃあきゃあとはしゃいでいた例に漏れず、わたしだって、なんて素敵なお話なんだろうと、うっとりしながら憧れたものだ。

大好きなひとが、一番大切なひとに逆らってまで、自分の手を引き歩んでくれる。

世界中で一番大好きなひとが、ずっと自分の手を――――。

（羨ましい……いいな、そんなひとがいてくれて）

父さまのように凄腕の魔術師でもない、アルテミスのような美人

でもない、なんの取り柄もないわたしじゃ、そんな夢みたいなこと望めやしないけど。
それでも、憧れることは誰だって自由だと思っていたから。
――――でも、今日でこのお話のこと、好きじゃなくなったかも。
だって、だって……。
（なんで手を繋いで旅なんかしちゃったんですかーッ！？　始祖さま――ッ！！）
そんなことしちゃうから。
いま、わたし、こんな目にあっちゃってるんですよおぉおおぉぉっ！

婚礼の儀式。
女の子が夢見る、人生の一大イベント。
この国では、創世の神話になぞらえて、いろんな決まりが定められている。
たとえば……。
『1つ、父神に会いに行った始祖たちに倣い、純白の衣裳で望むこと』
『2つ、祭壇は険しき霊山を模し、長く高い台の上に設すること』

そして、３つめは――――、

（……う、うぅ～……）

ダラダラと流れ続ける汗を背に感じながら、わたしは歯噛みした。

長い階段を登り終え、ようやくたどり着いた舞台上。

壮麗な設えの祭壇に見惚れる暇もなく、上でわたしたちを待ち構えていた、何やらやたら位の高そうな法衣を身に纏った５人のおじい様神官たちに、包囲されるかの如く円陣状に囲まれた。

彼らの異様に素早い動きに度肝を抜かれ、逃げ出すタイミングを失ってしまったわたしを余所に、５人は声を張り上げ、朗々と聖句を謳い始める。

……これは、一体何の拷問なんでしょう。

おじいさん神官たちもさることながら。

いまこの瞬間、この場を現世の悪夢へと変質させている、その象徴の最たるものを見下ろしながら、わたしは頭の中で悶えた。

実際には、凍りついたまま立っているだけなのだけれど。

隣に立つ人間にきつく握り締められた、わたしの右手。

これが、３つめの定め。

『――――花婿と花嫁は、式の間中、手を繋ぐ』

当然、これも始祖様たちの旅を真似したものでして、ええ。

つまり、今わたしがこういう事態に陥っているのは全部、始祖様たちが旅のあいだ所構わず、バカップル振りをひけらかしてくださったせいだと云えるわけだ。

……いえ、わかってますよ？　八つ当たりだってことぐらい。
でも、でもですよ。自分たちのイチャ付き振りが、後世において儀礼化されるなんて夢にも思わなかったんでしょうが、それにしたって、もう少し慎ましやかな交際が出来なかったのかと、ここは強く問うべきだろう。
（だいたい、婚前の男女が、人前でベタベタするなんて不潔ですよ、不潔っ！）
未成年の交際は、清らかであるべきなんですよ！？
――――なんて。
まあ、心の内側で誰かを非難してみても、それを表に出すことが出来ない小心者が、わたしという人間なわけで……。
（って、自分の小心振りに大人しく絶望してる場合じゃありませんでした）

いま、直面している問題を、きちんと直視しなければ！
わたしは繋がれた手元から、わたしをここまで罪人のように引っ立ててきた男へと、本人には決してばれませんようにと強く祈りながら、恐るおそる視線を移した。
その間、「あー、入口の扉が開いてからの記憶が、錯覚とか幻覚だったりで片付いてくれませんかねー……」などと、往生際悪く夢見たりもしたのだが。
結局は、希望を打ち砕かれ、がっくりと肩を落とす羽目になっただけだった。
……隣に立っているのは、どう目を眇め直して確認しても、やっぱり彼に間違い無さそうで。
――――　ヘリオス・アポロン・オリュンポス。
神の末裔たる我が国の王家・オリュンポスの第2王子にして、〈

太陽神〉の異名を冠する我が国切っての炎術魔導士。

それが、この男。

わたしを、だいきらいなひと。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

現王クロノスの第４子として生を受けたヘリオスは、神に連なる血筋にあっても稀であるほどの〈大いなる祝福〉を授けられた人間だった。

家柄最上、容姿端麗、おまけに頭脳も明晰。

見事に王道三拍子を備えていたものだから当然、子供の頃から目立ち際立つことこの上ない存在で、いつもみんなの注目の的だった。

――――神様も彼のファンだったのかは、まさに「神のみぞ知る」だけれど、どうやら武術と魔術の才能までお与えになったことは確かなようで。

わたしと同い年であるにも関わらず、いまや、我が国の四大軍の一翼・炎帝魔導軍を統べる若き将軍として大陸中に名を馳せており、その実力や否や、戦場に於いて彼と対峙した者が皆、煉獄の向こうに垣間見える死に恐怖する程なのだとか。

恐ろしく魅惑的な外見と身分、高い能力と実績に魅せられた人々

は数知れず。
特に、女性に関しては言わずもがな。
まあ、これだけの最上級エリート物件を、絶賛恋人募集中の看板を背負ったお年頃のみなさんが放っておくわけもなく。……おまけにどうやら、ヘリオス自身、来る者拒まずの精神に則って人生を謳歌しているようで。
これまでに聞かされてきた彼に関する色恋沙汰の浮世話は、天の河に煌めく星の数ほど。
噂話に疎いわたしの耳にもあれだけ入って来ていたのだから、きっと実際はもっとすごいことになっているのだと思う。

（そんな男と結婚！？　冗談じゃないですよおおおぉぉうっ）
そんなの嫌だ、嫌過ぎる。
このままでは、その悪夢が未来となってしまう事実に、わたしは怖れ慄いた。
わたしの理想の花婿様――――それは、母さまを一途に思い続けている父さまのような、優しい素敵男性。
完璧な容姿や家柄、特別な才能なんていらない。
女性にルーズなだけでなく、わたしを蔑んでいる人なんて、問題外。
――――わたしのことを、ちゃんと想ってくれる人。
ヘリオスとは対極に位置する男性が、わたしの理想なのだ。
なのに……なんでわたしが彼の花嫁？
何がなんで、そんなことに？
何も知らされず、だまし討ちみたいに連れて来られた挙句いきなり結婚だなんて、こんなの酷過ぎる。納得なんて出来ない。

……それに――――、
『――――逃がさない』
そう言ったのは、彼。
何の冗談？――――本気でそう思う。
わたしを捕えて、一体、貴方になんの益があるというのだろう。
ヘリオスの花嫁になりたい女の子はたくさんいる。
彼が望めば、きっと誰だって手に入るだろう。頷かない娘なんていないはずだ。
だけど、わたしは違う。
彼がわたしを望むなんて、そんなことは絶対にない。
（だって、あなたは、わたしのことを嫌っているじゃないですか）
彼がわたしと婚姻を結んで得られるものなんて、何もないのに……。

――――婚礼の定めに則り、二人を結び繋いでいる、手。

本気で、わたしを逃がさないつもりなのだろうか。
（はやく、嘘だと言って）
その方が、お互いのためでしょう？
今なら、このおじいさん神官たちも赦して下さいますって！
繋ぐだけでなく、根元まで深く絡め取られた指。束縛するようにわたしを捕えるヘリオスの左手を見つめながら、必死でそう願い続けているのに、その瞬間は未だ訪れない。
込められた力が強すぎて、手が痛い。
そもそも、手の大きさや骨格の形がこんなにも違うのだ。無理に絡めた挙句握り込まれているせいで、わたしの指の骨は折れそうなまでに軋んでいる。
もしも彼が、大嫌いなわたしの手を複雑骨折させたいとお望みなのならば、もうすぐ達成されるであろうことを、ぜひお知らせしたいところだ。

血が廻らないせいなのか、緊張と恐怖のせいなのかは分からないけれど、指先が冷たくなってしまっていて、もう感覚だって無いし。

……というか、本気で痛いんですって！

（勘弁してください、離してくださいっ。ていうか、むしろ触らないでくださいぃっ！）

隣の男に、毅然とした態度でそれを訴えるべきなのだろうが……いかんせん、恐ろしすぎて。

だって、煉獄の炎術魔導士ですよ？

炎で一瞬にして大軍を消し炭にしちゃうんですよ！？

そんなひとに楯突くなんて真似は出来ない。ぜったい無理、無理！。

（血が止まって指が壊死したら、アルテミスに治癒してもらわなきゃですね）

そして治療が終わり次第、全力で国外に逃亡しよう。

今直面している苦痛に満ちた現実から少しでも遠ざかりたくて、わたしは隣の男から逃げ切るという幸せな未来に向けて意識を飛ばした。

前向きなんだか、後ろ向きなんだか、自分でももう分からない。

いっそ誰か、そっと箱にでも詰めてここから運び出したあと、誰の目にも留まらない薄暗い倉庫にでも仕舞い込んでくれたらいいのに、だなんてことも考えたりする。

――――ああ……今日はわたしと父さま、そしてアルテミスの三人で、楽しい休暇を過ごすはずが……。

それがどうしてこんなことに。

せめて、こんな所にこんな恰好で来なければ回避できたのでは……と考えたところで、今日わたしをこの地獄のような空間まで連れて来た最愛の父と、親愛なる親友の笑顔が、脳裏にぱっと浮かんで消えた。

（……いやいや、そんな。あの二人がわたしを陥れるなんて、そんなことあるはずが……）
一応否定はしてみるけれど……たぶん、そうなんでしょうねー。
今さらながらその事実に思い至り、ずごーん、とばかりにどん底まで沈んでしまった精神（こころ）。
これ以上考えていると人間不信になりそうなので、思考を強制終了させる。
どうしよう。現実逃避で気を紛らわせるつもりだったのに、逃げたい願望をますます強めてしまった。
うぅっ。さっきから、胃がひどく痛い。
それに、心なしか、頭だってくらくらしてきたような。
（ここで倒れたら、見逃してくれたりするでしょうか？）
名案かもしれない――――そう考え、一瞬だけ実行してみようかと思ったけれど、止めた。
もし仮にそんな迷惑をかけたりすれば、後でどんな仕打ちを受けることか……。
目の前の祭壇を薪代わりに、骨の髄まで燃やし尽くされてしまうかもしれない、などという有り得なくもない物騒な想像が脳裏を駆け廻り、今度は吐き気を催してしまう。
――ああ、こんななのに結婚だなんて、本当にありえない。
怖い、彼が怖い。
平気でわたしを傷付けてばかりいる彼が、恐ろしくて堪らない。
彼を目の前にして、平常心で笑っていられたことなど、今まで一度もない。
そう、あの日。
初めて出逢ったあの日から、ずっと。

『――見下げた屑だな、お前』

世にも美しい声で言い放たれた、忘れられない呪詛。

（……あぁ、思い出すんじゃ無かったです）

01（後書き）

次の更新は、1～2週間くらいの間にしたいなぁと……。
そして今度こそ、ヒーローに台詞を！

よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5830x/

だって、だいきらい。

2011年10月26日08時14分発行